粕谷和夫の観察日記。爺ヶ岳山荘周辺のハイマツ林にはライチョウが生息していますが、今回の爺ヶ岳登山中ではライチョウに出会いませんでした。この写真は登山前日に大町山岳博物館でガラス越しに撮ったライチョウ雄です。この博物館では保全の必要性が高まっている雷鳥を生息域外で育てて増やし、その技術を確立するための試みを行っています。

紅葉台 新聞

第９３号
２０２３年
９月２日
発行人：関谷　孝

「シャツの裾出し」あるいは「出衣（いだしぎぬ）」について

関　邦義

今夏は例年にはない酷暑が続いている。暑くなると、よく見かけるのがシャツの裾出しである。これを格好良いと見るか、だらしないと見るかは、世代や育った環境、各人の美意識にもよるだろう。中高などの学校では、裾出しを禁止しているところが多いようだ。個人的には、学校はフォーマルな場なので当然だとは思う。

ファッションスタイリストの大山シュン氏によれば、「まず判断すべきなのはシャツの着丈の長さです。着丈が長いものはインして着ることを前提に作られているので、外に出して着ようとすると裾が長すぎてバランスが悪い」とし、「一方でカジュアル衣料のコーナーでハンガーに掛かって売っているようなシャツは外出しで着る物が多い」としている。私などは、外出し用のシャツまで中に入れてしまうので、家人から「みっともない」「ダサイ」とよく言われる。子どもの頃からの悲しき習性で、今更なおしようがない。

ところで、話は一気に古くなるが、今回は、王朝時代の話である。平安時代の貴族の間では、「出衣（いだしぎぬ）」とか「出袿（いだしうちき）」といって、下着の裾を「直衣（のうし）」や「袍（ほう）」の下から少しのぞかせて着るのが、むしろフォーマルな場での改まった着方であった（下図参照：旺文社「全訳学習古語辞典」による）。

具体的には『枕草子』（小学館「日本の古典 12」）の第三段に、「梅〔注：桜の間違いか〕の直衣に出袿して、まらうどにもあれ、御せうとの君達（きんだち）にもあれ、そこ近くにゐて物などうち言ひたる、いとをかし。」とある。田中澄江の現代語訳では「客人であれ、宮様の御兄弟たちであれ、表が白く、裏が赤の桜の直衣に出袿をして、その花の間近にいて話などされているのは見るからにはなやいだお姿である。」（**河出書房新社「日本古典文庫 10」**）。

また、第二〇段には、「昼つかた、大納言殿〔注：中宮定子の兄、藤原伊周（これちか）。道長の甥。〕、桜の直衣のすこしなよらかなるに、濃き紫の指貫（さしぬき）、白き御衣（おんぞ）ども、うへに濃き綾の、いとあざやかなるを出（い）だして、まゐりたまへり。」とある。同じく田中澄江の現代語訳は「昼ごろ、宮さまの御兄君、大納言伊周さま、桜の直衣の少しなよらかなのに、濃い紫の指貫を召され、直衣の下に白い小袖など重ね、そのうえに濃い紅の綾織物、いろもあざやかなのを出袿（いだしうちき）にしてお見えになった。」（前掲書）となっている。

これらの章段からは、女房として中宮定子（18 歳）に仕えることになった清少納言（推定28歳）が、定子の兄上でファッションセンス抜群にしてハンサムな貴公子である伊周に出会ったときの高揚感がよく伝わってくる。才気煥発でウィットに富んだ清少納言ではあるが、どうやら自分の容姿には自信がなかったようで、憧れのスターにでも出会えたような気持だったに違いない。

上述のような出袿が風流で、おしゃれな着こなしとする「をかし」の感覚は、単に作者「清少納言」の個人的な美意識によるものというよりは、当時の貴族社会の一般的な感覚だったもののようだ。現在の若者の意識に通じるものがあるのかもしれない。さて、皆さんはシャツの裾出しをどう思いますか。＜参考図：出衣＞

粕谷和夫の観察日記　爺ヶ岳特集

８月２日、３日の１泊２日で北アルプス爺ヶ岳の種池山荘に登ってきました。コースは、信濃大町扇沢から柏原新道の標高差１０００ｍの急坂往復です。予想していたよりはるかに険しい急坂の連続で、登りは膝から下の筋肉の痛み、下りは膝から上の筋肉の痛みがあり、苦しみながらも同行いただいた仲間に助けられ何とか怪我もなく下山できました。写真の種池山荘のバックは明峰剣岳です。山荘周辺の鳥や花は素晴らしかったです。

カヤクグリ

雀くらいの大きさで、目立つ模様がなく色彩は地味ですが、種池山荘の周りのハイマツで「チュリ　チュリ　チュリリリ　ヒリヒリ」などと聞こえる早口の澄んだ声でさえずっていました。この姿に暫し、登山の疲れを忘れました。

ホシガラス

ホシガラスは、カラスの仲間ですが高山性の野鳥です。雑食性で何でも食べますが、高山のハイマツの実が大好きです。爺ヶ岳の種池山荘の周辺はハイマツに囲まれています。８月３日の朝６時前、ホシガラスの朝食タイムなのか、１０羽ほどがハイマツ林に集まり盛んにハイマツの実を食べていました。「ガァーガァー」とにぎやかに鳴いていた朝食タイムの後はどこかに姿を隠してしまい、あたりはカヤクグリの世界に変わりました。

ウサギギク

ウサギギクはヒマワリのように黄色い花を咲かせる高山植物です。種池山荘の周りのお花畑に咲いていました。７回目のウサギ年に爺ヶ屋岳に登山でき、ウサギ・ギクに出迎えられたことに感謝です。

紅葉台新聞は、「高尾フモト同盟」の HP に公開されています。高尾の情報や働く人たちが紹介されています。興味を持った方は、覗いてみてください。また、皆様からの情報や投稿もお待ちしています。